

第 3 章 幼少期：1939 年頃～1945 年頃（2～8 歳）

飢饉の思い出

1939-1945 年（2-8 歳）は、私の幼少期の中で最も家が困窮していた時期である。戦争にイナゴの被害まで重なったのだ。イナゴの被害によって飢饉が起き、その影響は数年に渡って続いた。アウレフは死人がでるほどではなかったが、ティムムーンは深刻だったらしい。トゥアット、ティミ、グララ、サウラでも、深刻な食糧難に見舞われた。アウレフのナツメヤシ農園も相当に食い荒らされ、どの家でも主要な食物であるデーツを十分確保出来なくなった。市場でデーツの値段は目の玉が飛び出るほど高くなり、他の食料品も手の届く値段ではなくなった。何日も働いても、その賃金は、たった何キロかのデーツを買えばなくなってしまった。この頃は景気も悪く、若者でも糊口をしのぐ仕事を見つけるのは難しかった。ゆとりのある者は、蓄えがあるのを隠し、他の者に知られまいと必死になった。元々貧しかった者たちだけでなく、以前は自給自足していた者たちの中にさえ、物乞いをする者が現れる始末だった。また村の名家の中でも、それまで必死に体面を保ってきたのが、この災厄で一気に内情の苦しさが明るみに出てしまったところもあった。

私のうちも困窮していたが、母は芯の強い人で、子供たちにそれと悟られるようなことはしなかった。しかし、家には何も食べるものがない日もあった。私は泣いて食べ物をせがんだ。母は私をなだめて待つように言った。彼女は、いつもの夜と同じように、円錐形のレンガでできた三脚の七輪をすえ、ナツメヤシの薪を幾つかくべた。次に鍋に水を入れ、何か食べ物を入れたふりをして七輪にかけた。焚きつけに藁を薪の上に置き、古風な形の火付け石に、ズナド (Z'nad) と呼ばれる鉄片を二三回打ち付け火をつけた。火花が上がり、薪に火が燃え移って、いい葉巻のような匂いの煙が立ち上った。煙が生き物のように揺れ動き、黄色い炎が本格的に燃え出した。私にはこれらのシーンがまるで魔法のように思われた。細い煙に続いて現れた炎は、まるで突然に目覚めた生き物のようだった。母の顔には黄色い炎の色が映っていた。そうした一連のシーンに魅せられて私はいつの間にか空腹を忘れていた。

「さあ、料理が煮えるのを待つ間、素敵なお伽噺を話してあげよう。」

私は喜んで、母の正面に腹這いになり、両肘を床について顔を載せ、話が始まるのを待った。

「あるところに若い男の人と若い女の人がいて、二人は結婚しました。二人には男の子が一人と女の子が一人生まれました。夫は毎朝農園に働きに行き、妻は家に残って子供や家畜の世話をしたり、家事や料理をしました…」

話が始まって少しすると、私は急に眠くなり、後は何も耳に入らず何も覚えていなかった。眠りに落ちる瞬間、私はそれまで感じていた空腹で惨めな気持ちを忘れていた。

翌朝早く私は目が覚めたが、昨夜の七輪の傍ではなく別の場所に寝ていた。私は泣いて家を飛び出て、私を可愛がってくれていたゾーラ伯母さんの家へ駆けこんだ。

「どうしたの？何があったの？」

伯母は私を抱き寄せながら聞いた。

「タベ、リリー（母のあだ名）は、ぼくが眠った後ひとりで夕飯を全部食べちゃったんだ。ぼくには何もくれなかった。」

ゾーラ伯母さんは、彼女の妹のアイーシャも呼んできて、私に起きたことを説明するよう言った。私が話すと、ゾーラ伯母さんは笑った。

「ここで待っておいで。母さんを探して、厳しくしかってきてあげるから。」

伯母が私の肩を持って母をしかると言ってくれたので、私は勝ったような気分になり、満足して泣き止んだ。少ししてゾーラ伯母さんは戻って来たが、手にはどこかで調達したらしい料理の残りを持っていた。そして、一芝居打った。

「かわいいアーメッド、お前の母さんをしかろうと思ったけど、母さんは夕飯を全部食べてなかったみたいだよ。お前の分はちゃんと残してあって、器に入れて、猫に食べられないように隠したんだって。どうして朝起きた時にリリーに聞かなかったの？」

（リリーという母のあだ名は、彼女が踊る時、手を打ちながら一つのフレーズ“アハム・リリー・ダウアイア” [Aham Lilli daouaia] を繰り返すことから私が付けた。）

伯母は、料理の残りを鍋に入れて温め、私が食べられるようにしてくれた。「さあ、お食べ、」と言って彼女は私に器を差し出した。腹ペコだったので私は慌てて器に手を入れようとした。

「待って！何するの？手を洗わなきゃだめよ。いつも何て言われているか覚えている？」
伯母に言われて仕方なく、私は中庭の隅に置いてある素焼きの水瓶の所へ行き、瓶を傾けて桶に少し水を注いだ。しかし再び瓶を立て直そうとした時、手元を誤って瓶をひっくりかえしてしまった。一瞬で中身が全部ぶちまけられ、庭に大きな水たまりができた。水を汲むため女たちは 200 メートルも離れたフォガラまで行かなければならないというのに。それに、おお神よ、今晚私たちはどこで寝ればいいのか？私は走って逃げようとした。しかし、伯母に、いいから手を洗ってしまいなさい、と言われて、私はうなだれてそれに従った。

「大丈夫。今は、夏のように庭で寝るほど暑い季節でないから。」

叔母はそう言ったが、実際には、春のこの時期、唯一快適に寝られる場所は中庭しかなかった。私は壺を立て直した。

「手を洗いなさい。」

伯母はもう一度私に命じた。私は手を洗ったが、失敗が恥ずかしくて顔を上げられなかった。「さあ早くお食べ、」と伯母は言った。私は手で皿から食べ物を口に運び、飢えを満たした。ゾーラ伯母さんは、かわいがっている甥のそうした様子を、慈悲に満ちた目でじっと見ていた。

ハマジの孫、コーラン学校へ

うちには娘は二人いたが、息子は私一人だったので、人生の最初の六年間、私は両親はもとより二人の伯母からも甘やかされて幸せに暮らした。父は家族を養うために、遠方に

交易のための特産物を求めて出かけ、留守がちだったので、私たち子供はほとんど母の手によって育てられた。6 歳になった時 (1943 年)、私はコーラン学校に入った。初日、新入生の家族は、生徒たちに食事を振舞う。献立はラーサ (lah'sa) と呼ばれる麦のスープだった。新入生は、新品の木の書字板を携え、また、いくばくかの金を持って行ってタレブ (訳注: コーラン学校の教師。自身がイスラム神学を学ぶ修道士でもある) に渡す。新入生が入る日、生徒たちは、食事が振舞われるだけでなく、夕方の授業が免除されるのでとても喜んだ。当時タレブへの謝礼は、生徒の親たちから物品で支払われた。そのため、生徒は毎週年齢によって決められた量のデザートを持っていかなければならず、授業がない日にナツメヤシ農園へデザートを拾い集めに行った。他にも、冬は暖房用と灯りに薪を持って行くことになっていた。これらの義務はハルール (haloul') と呼ばれる。何か月かするとタレブは、私の熱心さを認め、特別に目をかけてくれるようになった。私は言うことをよく聞くおとなしい子供に見えたようだが、実際には、例えて言うなら月夜の晩に足元をよく見ないで歩くと言うか、若干不注意なところもあった。大人たちにはあまり近寄らなかったが、彼らが話すことには興味津々で、そう遠くない所で、無邪気に自分の遊びに熱中しているふりをしては、大人たちの会話に耳をそば立てていたものである。



最近のコーラン学校 (2002 年記者撮影)

エル・ウルハト (El-ourfat) という祭りは、生徒たちにとって最も重要な行事である。これは、エル・フィトル祭 (Aid El-fitre。訳注: イスラム暦の 9 月＝断食月明けの祭) とエル・アドハー祭 (Aid El-Adha。訳注: イスラム暦の 12 月 10 日に行われる「犠牲祭」) に並行して行われる。祭りの準備期間になると、生徒たちはまずタレブにいくつかの卵と少しの金を贈る。そして、大人たちに手伝ってもらって書字板に色とりどりのモザイク画を描く。年少の生徒たちは、この作業が大好きだ。子供たちは、祭りの後の 2 週間の休みの中この絵を大事にとっておく。エル・ウルハトの準備は、エル・フィトル祭とエル・アドハー祭のそれぞれ 5 日前から始まる。祭り前の授業の最期の日、生徒は全員早朝学校

に集まり、教師たちや村の名士たちに付き添われて墓地を何カ所か回る。彼らは墓地でコーランを唱え、自分たちと両親、それに村人全てのため神の加護を祈る。その後二、三人の大人が子供たちと残り、残りは家へ帰る。生徒たちは全員で、時にはグループに分かれて町の道から道へ、家から家へと練り歩き、それぞれの家の前でコーランを読み上げる。一軒ごとに 5 分から 6 分くらい唱和し、その後沈黙して両手を天に掲げ、その家に神の恩恵があるように祈る。次に挙げた手を顔の上を下ろす。この動作を 3 回繰り返す。こうしたお祈りが一通り終わるまで、その家の主人か主婦が一家を代表して立ち会うが、生徒が立ち去る時にデザートや穀物、それに時には少しお金をくれる。生徒たちは町を回り終えるとタレブのところに来る。贈り物は一旦全てタレブに差し出すが、タレブは生徒一人一人に一掴みずつ分け与える。生徒たちはこれを家へ持ち帰るのだが、この子供たちの取り分の中には神の恵みが秘められていて、家庭に幸せをもたらしてくれると信じられていた。

このような町の練り歩きはアシュラ祭(訳注:シーア派の祖フセイン殉教を記念する祭)の時も行われる。アシュラ祭は、エル・ムッハラム月(訳注:イスラム暦の1月)の10日目に行われる。生徒たちは夜の始まりに出発する。一行が町を練り歩き家々を回るところは同じだが、この時もらうのはクレープで、タレブのところに戻った後、生徒たちで分け合う。タレブは私のことをかってくれていたのだから、自分の目の届かない間、仲間たちを監督するよう私に言いつけた。生徒の中には私より年長の者もいたので、この仕事は私の優越感と自尊心を刺激し、この後仲間内で私を出し抜こうとする者があると、むきになって張り合うようになった。

コーラン学校は単に読み書きを覚えるだけの場所ではなく、子供たちはそこで神の恩恵を授かり、それを家へ持ち帰ると信じられていた。天使は、まだ原罪を犯していない無垢な子供たちを守護してくれると考えられていたからである。そのため大人たちは、子供たちと一緒に神に祈るのを好み、祭の時には共に町を回ったのである。こうした子供たちの行進は、定例の祭りの時の他に、町で伝染病がはやった場合にも臨時に行われた。いずれの場合も、まず皆で墓地へ行き、沈黙を守ったまま数分間両手を天にかざして祈る。神が自分たちに慈悲を垂れて災いを取り除いてくれるよう、死者たちに神へのとりなしを頼むのである。



アウレフ地方のマラブー（聖者廟）と墓地（2002 年訳者撮影）

小さい頃の思い出あれやこれや

私の小さかった頃日常生活の中で起こったいくつかの出来事を話そう。3 歳（1940 年）になるかならないかの年ごろから、私は次第に自分という存在を意識し始めた。私は子供のころ、あやうく命を落としかけたことがある。それはある夏の宵で、私は家の中庭で籠を転がして遊んでいた。当時その籠はずいぶん大きく感じられたのを覚えている。突然私は喉が張り裂けんばかりの叫びを挙げた。サソリに刺されたのだった。私はまだ何が起こったのか正しく考え判断するには幼すぎ、ただその鋭い痛みでパニックになった。後から人が言うには、一瞬の出来事だったという。私はその当時まだ片言しかしゃべれず、大人の言うことも完全には理解できなかったが、母が私を抱いて泣きながら「救世者にして寛容なる神よ、どうぞこの子にご慈悲を！」と繰り返していたのを覚えている。母は伯母のゾーラのところへ走った。母が伯母の家の広い中庭を走っている時に私は意識を失い、後

は何も覚えていない。もちろん人々は私の命を救うために十分な処置をしたにちがいない。こういう時は普通、タレブが呼ばれ、コーランの一説を唱える。毒は心臓を冷たくすると信じられていたので、犠牲者には鎮痛作用のある薬草を入れた温かい飲み物を飲ませた。

小さい頃私には悪い習慣があった。ふつう大人は子供に紅茶を与えない。しかし、ゾーラ伯母さんは、私が時々紅茶を盗み飲んでいるのに気づいていたようだった。私は伯母の動きを見張って、彼女がフォガラに水を汲みに行くのを確かめると、急いでポットの注ぎ口に直に口を付けて中身を少し飲みこんだ。伯母はいつもお茶の入ったポットを七輪の燃えさしの上に置いて熱い状態にしていた。私は前にもやった通りにしただけだが、この時中の紅茶は非常に熱く、私は口の中を火傷して床を転げまわった。以来、二度と同じことはしなくなった。

また、こういう事件もあった。その光景は私の脳裏に深く焼き付き、忘れようとしても忘れられない。人の体から大量の血が流れるのを見たのは、この時が初めてだった。その時父は大工仕事をしていて、私も傍にいた。妹のゾーラも近くの絨毯の上で寝ていた。父は立ち上がり、壁の上の方に掛けてある鋏を取ろうとした。しかし、手元を誤って 2 メートルほどの高さから鋏を取り落してしまった。鋏は、当時まだ 2 歳足らずだった妹の顔の眉の辺りに落下した。傷口がぱっくりと開き、近くにいた私ははっきりとそれを見てしまい、ショックでわんわん泣いた。まだ幼い子供の心に、血の流れる光景はあまりにもショックだった。この時の大怪我で、妹の顔には後々まで目につく傷跡が残った。私は自分が親になってからは、犠牲祭でヒツジを屠る時、自分の子供たちには傍にいるのを禁じた。

この頃のこと、もう一つ覚えていることがある。毎年エル・バイヤド月（第 1 月エル・ムッハラム月に続く月）の間、少年たちは全員、ハーブや鉱石を包んだ布製の小さなボールを右足に吊るす習慣がある。女の子たちは同じ事はしない。エル・バイヤド月の間ジン（悪魔）は自由に動きまわることができ、若い男を襲うが、このお守りは悪魔を寄せ付けないと信じられていたからだ。この月の終りには、老婆が二人一組で緑のナツメヤシの枝を手にもって家々の戸口を回り、「ヤ・ダル・エン・ネーリ・バッラ」と歌う。この歌詞は、古いベルベル語の名残らしく、「悪魔よ、出ていけ！」という意味だそう。老婆たちはナツメヤシの枝を軽く振る。各家の母親は外へ出て、息子の足から布のボールを外し、ナツメヤシの葉に結び、この枝を三度跨ぐ。一度跨ぐごとに母親は地面に唾を吐きつける。儀式が終わると老婆たちにデーツや穀物それにお金を渡した。老婆たちに多くをあげる必要はなく、手ぶらで返しさえしなければよかった。老婆たちの巡回が終わると、ナツメヤシの枝は、ジンが住むと言われる遠くの洞窟へ捨てられた。人々は、洞窟には目に見えない何かを蠢いていて、そこに足を踏み入れる者に害をなすと信じており、子供たちには決して近づかないようきつく言いかかせていた。この迷信は、ティディケルトに関する章で再び詳しく話そう。